

黒毛和種繁殖雌牛の 妊娠末期の適切な飼養管理技術

近年、佐賀県内の生産現場では分娩間隔の長期化が問題となっており、その要因の1つに妊娠末期の低栄養水準の事例が見られ、子牛の発育への影響も懸念されています。一方、分娩前後にビタミン製剤を添加することで分娩間隔が短縮された事例があり、低栄養水準の給与法の改善につながる可能性があります。そこで、佐賀県畜産試験場では、妊娠末期の栄養水準の低下が分娩後の繁殖成績や子牛の発育に及ぼす影響を調査し、繁殖成績向上や子牛の局所免疫強化に関連するとの報告があるβカロテン製剤の添加効果についても検証しましたので紹介します。

☆ 技術の概要

1. 妊娠末期に低栄養水準（CP80%, TDN102%, DM93%）の飼料を給与すると、対照区（CP103%, TDN125%, DM112%）に比べて、初回授精日数が長期化し、初回授精受胎率が低い値になりました。また、哺乳期間中の疾病罹患率及び1頭当たりの平均治療回数が最も高い値となりました。
2. 低栄養区に分娩前21日間βカロテン製剤（200 mg/日）を添加した低栄養+添加剤区は、出生後24時間、72時間及び7日後における出生子牛の血清中IgG含量が低栄養区に比べて有意に高く、対照区と同等以上の水準で推移しました。
3. 低栄養区における子牛の体重は2カ月齢で有意に低下しますが、低栄養+添加剤区は対照区と同様に推移しました。

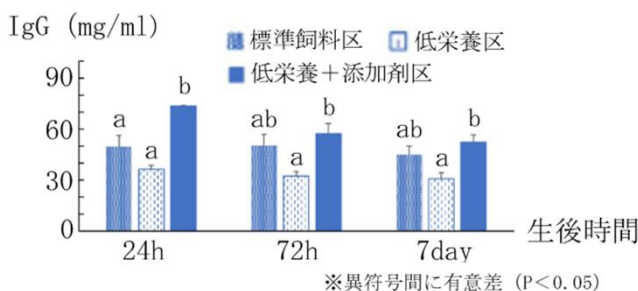


図1 出生子牛の血清中IgG含量と出生後の経過時間

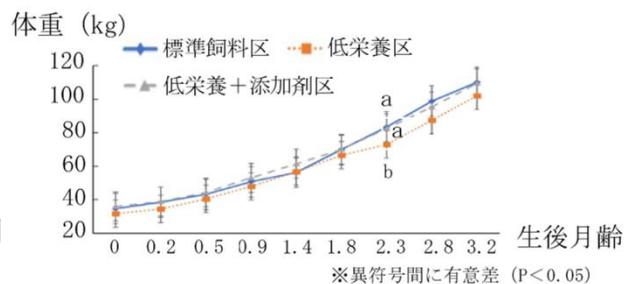


図2 子牛の体重の推移

☆活用面での留意点

1. 本試験では、過大子や母牛の過肥による難産は発生していません。繁殖成績の向上や出生子牛の発育向上のためには、飼料分析・計算を定期的を実施し、日本飼養標準に準じた適正な飼料給与を行って下さい。
2. 母牛に給与する牧草の栄養価が低い場合、本技術の応用により母牛の初乳品質及び子牛の発育向上が期待できます。
3. 詳しくは、佐賀県畜産試験場・大家畜部・大家畜研究担当 山田 海夢 (Tel0954-45-2030) に問い合わせ下さい。